

インターバンクの声（2017年6月7日）

月曜日の朝の時点での為替週間展望は、もっぱら8日の欧州中央銀行(ECB)理事会、英国の下院議員選挙、 Comey前 FBI 長官の議会証言といった注目イベントまでは大きな変動はないだろうとの見方が大勢だった。

確かに昨日の東京市場の朝9時を回った頃まではその見方は正しく、円相場も週末の米雇用統計後にドル売りになってからの110円台中盤を中心にした狭いレンジ内での値動きを続けていた。

ところが、後からは何とでも言い訳可能だが、サウジアラビアなど中東4か国がカタールとの国交断絶や、ドルの下値支持線となっていた一目均衡表の日足雲下限や200日移動平均線を割り込んだとの解釈が飛び交い、気が付けば109円台までドル売り・円買いが進んでいた。

ダメ押しは豪州の1-3月期の経常収支の赤字幅が改善せずに豪ドル売りが進み、豪ドル/円も下落したことによる円買い余波だった。

こうした展開になると、今度は108円台へ下落する可能性が高まったなどの解説が増えるのはいつも通りだが、110円を割れば大量のドル買いが待っているとの話はどこに行ったのだろうか。

提供：SBIリクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。